

2022年5月22日復活節第6主日説教

ヨエル書 2章 21-27 節

使徒言行録 14章 8-18 節

ヨハネによる福音書 14章 23-29 節

先週の主日から礼拝で聖歌を歌い始めました。マスクをしたままですので、呼吸が苦しくならないように、どうぞご注意ください。先週の木曜日、カトリックの松沢教会で行われた、世田谷地区キリスト教一致祈祷会の準備会に出席してきました。準備会の為、七つの教会からしか集まりませんでした。コロナ禍での礼拝についても話題となりました。プロテスタント教会からカトリック教会までコロナ禍の対応はそれぞれでしたが、聖歌あるいは讃美歌を歌えないのは寂しい、というのが共通の声でした。わたしたちの教会は、先週から一つ恵み豊かになったといえます。

さて、本日の旧約日課は、「ヨエル書」です。『聖書（旧約）』の分類としては、「十二小預言書」の一つになります。成立年代は、幅があります。紀元前9世紀頃、北イスラエル王国・南ユダ王国が滅ぼされる前とする説から、バビロン捕囚の終了後、復興したイスラエルが再びシリアなどの支配を受ける紀元前4～3世紀頃とする説です。いずれにしても、イスラエルが安定している時ではなく、危機的状況に書かれたと思われまます。わたし自身は、後者だと思いますが、大切なのは正確な成立年代の決定ではなく、その内容です。「ヨエル書」は、わずか4章しかない短い文章の中に、イスラエルの滅びと復興を語っているからです。

「ヨエル書」の全体構成を簡単に見ますと次のようになります。1章から2章11節までは、主なる神様の怒りの日としての「主の日」が到来することによって起こる、イスラエルの徹底的な破壊が書かれています。2章12節から3章の終わりまでは、そのイスラエルの回復について、そして、最後の4章1節から15節は、イスラエルに害をもたらした諸国民に対する報復について書かれています。4章16節以降は、ユダを中心としたイスラエルの救いが語られ、「わたしは彼らが流した血の復讐をする。必ず復讐せずにはおかない。主はシオンに住まわれる」という言葉で預言書は閉じられます。

本日読まれた箇所は、「大地よ、恐れるな、喜び躍れ。主は偉大な御業を成し遂げられた。野の獣よ、恐れるな。荒れ野の草地は緑となり木は実を結び、いちじくとぶどうは豊かな実りをもたらす。」（ヨエル2:21-22）と始まっており、そこだけ読みますと、主なる神様の天地創造の喜び、あるいは自然界に対する恵みの豊かさを感じます。しかし、単にそう受け取ってははいけません。その前の部分で、主の日による徹底的な破壊があり、そこからの回復の喜びを語っているからです。大切なのは、「イスラエルのうちにわたしがい

ることを、お前たちは知るようになる。わたしはお前たちの神なる主、ほかに神はいない。わたしの民は、とこしえに恥を受けることはない。」(ヨエル 2:27) とある通り、主なる神様がおられるから、イスラエルが存在できるということです。そして、そのイスラエルの存在から、諸国民が主なる神様の存在を理解するということです。この預言書を記した人の名前「ヨエル」は、「主は神」という意味です。「主のみが神」と意識してもいいかもしれませんが。その当たり前のことをイスラエルが深く理解する時、そのイスラエルを通して、世界が平和になると告げているのです。

このような表現は、いわゆるユダヤ教の「選民思想」、あるいは唯一神教の排他性と批判されそうです。主なる神様を信じる人以外を、信仰を理由に差別したらそうかもしれません。しかし、主なる神様が求めておられることは、主なる神様を信じない人々を差別することではありません。主なる神様を信じる人々が模範となることです。それは、人間の知恵・欲望・思いなどで生み出される事柄、大切にされる事柄に信頼を寄せても、そこに真の平和がないことを示すことです。バルナバとパウロも、本日の「使徒言行録」箇所によれば、「この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。」(使徒 14:15) と述べていますが、この世界は主なる神様が創造された、それゆえにすべては主なる神様のものである、その主なる神様にのみ信頼を寄せる、そのように信じることから、真の平和が始まるからです。

この世界の土地は、すべて本来は主なる神様のものであると考えるならば、それぞれの歴史的な根拠に基づいて、土地を奪い合う戦いは、悲しみしか生まないと思います。あるいは、人間の知的な研究と予測に基づいて地球環境を守るために、主なる神様が作られた自然環境を徹底的に破壊して、大規模に太陽光発電装置を設置することは、愚かさの象徴でしかないことがわかります。もちろん、現実的には、主なる神様への信仰があれば、戦いが起こらないということもなく、戦いは、今までもあり、そして今もあります。主なる神様への信仰があれば、環境問題やエネルギー問題が即解決するわけではありません。しかし、だからこそ、主なる神様は、『聖書』、「ヨエル書」を通して、「わたしに立ち返れ」(2:12、13) と時間と空間を通して呼び掛け続けているのだと思います。「主なる神様に立ち返る」とは、言い換えれば「悔い改めること」です。「主なる神様に立ち返る」時、どのようなことが起こったとしても、かならず平和が訪れず、そして慰めがあると、主なる神様が約束してくださっているからです。

さて、このような「ヨエル書」が本日復活節第6主日にある理由ですが、それは、本日の個所の次の章で、「神の霊の降臨」という個所が来るからであるかもしれません。すなわち、本日の個所を、主の霊が注がれることを期待する内容として受け止めなさいということです。ただし、そのように受け止

めたととしても、この「ヨエル書」が語る使信は、同じです。本日の個所に示された主なる神様の回復の喜びは、主なる神様へ「立ち返ること」を通して実現するのであり、その「立ち返ること」は、人間の努力ではなく、聖霊の働きによってのみ、可能となるからです。

本日の福音書は引き続き「ヨハネによる福音書」ですが、「聖霊を与える約束」という小見出しがある個所の一部分です。主なる神様の霊・聖霊が与えられることを期待するという意味では、内容的につながっているといえます。イエス様が最後の陪餐において弟子たちを教えている個所の一部でもあります。「ヨハネによる福音書」における最後の晩餐は、他の福音書とことなり、物語全体の比較的早い段階の13章から始まります。そして、イエス様と弟子たちとのやりとりのお話自体は、他の福音書と異なり、長いものとなっています。イエス様は、弟子たちに最後の教えをしています。イエス様は、14章の最初で、「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」(ヨハネ14:1)と主なる神様を信じることを教えます。次に「わたしを見た者は、父を見たのだ」(ヨハネ14:9)と、その神様から遣わされたイエス様自身、つまり子を信じるようにと教えます。そして最後に、「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」(ヨハネ14:6)と、聖霊について教えており、あなたがたに聖霊を遣わすと教えているのです。本日の個所は、これらの流れの中のまとめの部分といえます。

さて、これらの流れを見ますと、みごとに父、子、聖霊と話がつながっています。「ヨハネによる福音書」の時代には、まだ三位一体という神学は確立していません。しかし、このヨハネにある記述を見ますと、教会がイエス様を通して主なる神様について理解しようとした時、すでに父なる神と、子なるイエス様、そして聖霊を結び付けて理解しようとしていたことがわかります。

本日の個所で、イエス様は、弁護者である聖霊をわたしたちに遣わすと約束しています。しかし、それには前提があります。「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」(ヨハネ14:15)。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る」(ヨハネ14:23)とある通りです。イエス様がわたしたちに聖霊を遣わすと約束されるのは、わたしたちがイエス様を愛し、そしてその掟と言葉を守ることが前提となっているのです。ただし、その前提は、決して難解な事柄ではなく、極めて明瞭な事柄です。イエス様の掟とは、互いに愛し合うことであるからです。13章41節で、「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と述べている通り、イエス様は、主なる神様を愛し、イエス様を愛し、そして人間同志愛し合うならば、聖霊を遣わすと約束しているのです。もちろん、そのように愛をどう具体化する

か、それが大変な課題ではありますが、その課題の達成を目指し続けるのが教会です。そして、この課題達成の先にあるのが真の平和です。

この平和ということを考えるならば、今の世界は、世界規模で決して平和ではない状態です。そもそもこの平和という言葉自体の意味が、それぞれの価値観あるいは歴史観で異なります。だから、それぞれに平和を目指すために戦争が起こるともいえるのですが、『聖書』が示す平和、主なる神様が求める平和は、本日の福音書でイエス様が示されたように簡単です。人間が主なる神様を愛し、また人間同士が互いに愛し合い、主なる神様の霊が注がれるもと、誰も悲しむものがない世界を維持することです。真の平和を目指すとは、この世界がそのようになることを目指すことですが、この課題は、人類の究極の目標といえるほど簡単ではありません。

しかし、一般的に平和といえば、戦いが無い状態です。今の世界は、全世界規模で、これすらも維持できない状態です。わたしたちの日本は、まだよい方かもしれません。しかし、世界的に戦いの準備が始まる時、残念ながら、その動きに呼応することが、この平和を維持することであり、呼応しないことは、戦いを発生させることにつながるといふ現実があります。

このような現実の中で、わたしたちはイエス様を信じています。またイエス様を信じ続けてきました。本日の個所で、イエス様は、「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」(ヨハネ 14:27)と語っています。わたしたちの教会に、平和はあるのでしょうか。あるいは、教派と教派の間という意味で、教会と教会の間に平和があるのでしょうか。先週、世田谷地区キリスト教一致祈禱会の準備会があったことからわかる通り、イエス様を信じる教会といっても、これからまず一致を目指しましょうというのが現実です。

「ヨエル書」が書かれてから、イエス様の時代まで数百年、イエス様によって教会が誕生してから二千年、これだけの時間が経過しても世界は平和ではありません。しかし、だからこそ、わたしたちは、互いに愛し合うことと目指し、教会の様々な礼拝と活動の中で、祈りつつ、聖霊がより深くわたしたちに降り注ぐことを求めるのです。そしてその聖霊を受けつつ、イエス様がわたしたちに示し続けておられる愛を、具体化しようと試みるのです。この課題はわたしたちが生きている間に達成できる事柄ではありません。しかし、だからこそ、次の世代に伝える続けることが大切です。

もうすぐ教会の暦は聖霊降臨日を迎えます。わたしたちは、あらためてわたしたちの教会が創立された意義を考えます。わたしたちの教会が、世界に真の平和が満ちることを目指す、すべての教会の一つであることを、あらためて心に刻みたいと思います。